

広国ドリル(国語)のポイント その4 文法の話②

国語の4回目です。今回も、前回に続き、文法の話です。

「大きな」の品詞は、分かりましたか？ 一見、形容動詞のようですが、活用はしません(「大きに」「大きだ」となりません)。そして、「大きなカブ」のように、名詞しか修飾しません。ということで、連体詞です。ただし、歴史的には、「大きなり」という形容動詞の活用した形が元になっているということです(『精選版 日本国語大辞典』より)。「大きい」という形容詞も、「大きなり」が元になっているそうです。

今回は、「つながり」に注目します。大きく分けると、文の中でのパーツ間のつながりと、文章での文間のつながり(さらには段落間のつながり)があります。

文をつくるときに、中心となるのは述語です(諸説あります)。「何がどうする／どんなだ／何だ」の「どうする／どんなだ／何だ」です。述語によって文の基本的な「型」が決まります。例えば、「入れる」が述語だと、「**だれが何を何に**入れる」のように決まります。その型に、適当な語句を入れると、文が完成します(「小池さんがコショウをラーメンに入れる」など)。

「が」「を」「に」は、助詞(格助詞)と呼ばれ、述語とその他のパーツとの関係を表します。日本語は、この助詞のおかげで、文の意味が理解できます。例えば、レシピに「キャベツ、豚肉、のせる」とだけ書いてあっても、キャベツと豚肉のどちらが上か分かりません。が、助詞を入れて、「**キャベツに豚肉を**のせる」と書けば、はっきり分かります。

助詞には、はっきりした意味がないので、存在を忘れがちです。しかし、**日本語の文において大変重要な役割**を果たしています。文の意味を正確に理解するには、**助詞を手掛かりに**して、文のパーツがどのような関係でつながっているか理解しなければなりません(ちなみに助詞には、格助詞、副助詞、接続助詞、終助詞など、いくつかの種類があります)。

ところで、英語には「が」「を」「に」に当たる言葉がないですね。それなのに、なぜ文の意味が分かるのでしょうか？ (答えは、また次回。)

助詞の中で注意が必要なものに、「の」(格助詞または連体助詞)があります。「鬼滅**の**刃」「進撃**の**巨人」「銀**の**匙」「逆転**の**カープ」「動物**の**お医者さん」など、とても頻繁に使われる助詞ですが、「の」はどんな意味を表しているのでしょうか？ 実は、「の」は体言同士をつなげ、後の体言を前の体言が修飾することだけを表し、それ自体に決まった意味はありません。読むときは、前後の言葉の意味からその関係を解釈します。

「動物のお医者さん」から、どんな「お医者さん」を思い浮かべたでしょうか？ コアラなどの

動物が扮したお医者さん？ 動物を診るお医者さん？ 漫画のタイトルとしては後者ですが、知っていないと迷ってしまいます。読むときだけでなく、書くときも、「の」の表す関係があいまいになっていないか気をつけましょう。例えば、「ユーチューバーの父」は、「ユーチューバーである父」「娘がユーチューバーの男性」などと書き分けると、意味がはっきりします。

述語で文の型が決まるのですが、主語と述語がかみ合わない文を書いてしまうことがあります。例えば、「今年の目標は、もう一度優勝したい」という文は、どこことなく収まりが悪い文です。「今年の目標は、もう一度優勝することだ」と自然です。読み返せば気づくはずですので、自分で書いた後、読み返す癖をつけましょう。もし、読んでも気づかない人は、要注意です。広国ドリルで練習して、日ごろから整った文章を読んで、日本語の感覚を取り戻しましょう。

また、文の中では、修飾関係があいまいになってしまうことがあります。例えば、「アツアツの鉄板にのったお好み焼き」では、「アツアツの」が鉄板につながるのか、お好み焼きにつながるのかあいまいです。「アツアツの、鉄板にのったお好み焼き」「アツアツの鉄板にのった、お好み焼き」のように「、」を打ったり、「鉄板にのったアツアツのお好み焼き」のように、語句の順番を入れ替えたりするとはっきりしますね。このような文の中での語句のまとまりや、つながり方についても、広国ドリルで復習しておきましょう。

文と文(段落と段落)をつなぐときには、「そして」「しかし」「例えば」「したがって」「つまり」といった接続語を使います。接続語は、道路の案内標識にたとえられることもあります。後に続く文章がそれまでの文章とどうつながっているか、次にどう進むかなどを示しているということです。

「しかし」は逆接(それまでとは対立する方向への進路変更)の接続語です。さらに大事なのは、「しかし」の後に筆者の言いたいことが出てくる傾向があるということです。下の a だと、「辛い」が結局言いたいこと、b は「おいしい」が結局言いたいことという感じがしますね。読むときは筆者の意図の理解、書くときは、自分の主張の効果的な伝達に役立ちます。

- a. 広島のがんすはおいしい。しかし、辛い。
- b. 広島のがんすは辛い。しかし、おいしい。

※「がんす」は広島で人気がある食品名です。広島の方で「ございます」という意味。



今回説明した「つながり」の理解は、読解力の向上や、分かりやすい表現の工夫につながります。広国ドリルでたくさんの実例を使って復習できますので、ぜひ取り組んでください。